

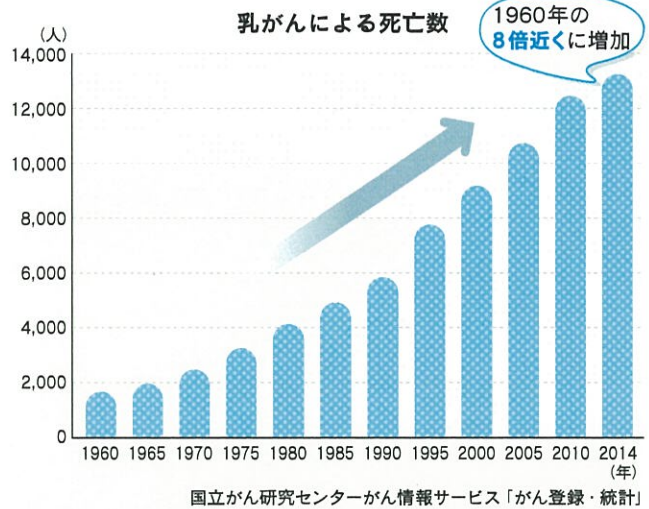
乳がん

検診の
スズメ

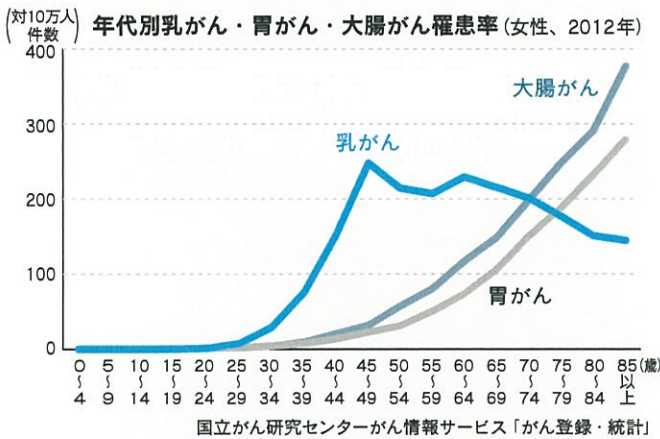
乳がんは「乳腺」にできる悪性腫瘍です。乳腺は、母乳を作る「小葉」と、母乳の通り道である「乳管」で構成され、乳がんの多くは乳管で発生します。発生や進行には女性ホルモンが影響しており、女性のライフサイクルや生活習慣の変化から、近年大幅に増加しています。

乳がんの危険因子

- 初潮が早い・閉経が遅い ● 妊娠や出産経験がない
- 初産年齢が遅い ● 授乳歴がない ● 閉経後のホルモン補充療法
- 肥満(閉経後)、飲酒、喫煙 ● 高身長 他



40歳から50歳代が多い



乳がんの罹患数は年間7万件以上となっており、女性がかかるがんでもっとも多いがんです。胃がんや大腸がんは高齢になるほどかかりやすいがんですが、乳がんは40歳から50歳代と比較的若い年代から多いのが特徴です。

乳がんは早期に発見して治療をすれば予後がよいため、症状が出る前に検診で早期発見することが大切です。

症状として多いのは、乳房のしこり、乳頭からの分泌液、乳房の痛みなどです

気になる症状があったら、40歳未満の方でも受診しましょう



乳がん検診を受けましょう

国では、40歳以上の女性に、問診およびマンモグラフィ(乳房X線検査)による乳がん検診を、2年に1度受診することをすすめています。遺伝性のがん(※)が疑われる場合は40歳未満でも検診を受けましょう。また、気になる症状がある場合は、検診を待たずに早めに専門医を受診すること

が必要です。乳がん検診では、マンモグラフィのほか、超音波(エコー)検査なども行われています。

(※) 家系内に若くしてがんにかかったり、何度もがんにかかった人がいる、また特定のがんが多く発生しているなどの場合。

再検査は必ず受けましょう

乳がん検診を受けた結果、異常が見つかった場合は再検査や精密検査を受ける必要があります。再検査が必要だからといって、がんであるとはかぎりません。また、検診で

発見される乳がんの多くは早期がんといわれます。再検査をすすめられたら必ず受診しましょう。

マンモグラフィ(乳房X線検査)

国が推奨するマンモグラフィは、2枚の板で乳房を片方ずつ挟んで撮影します。圧迫による痛みもありますが、月経前の1週間を避けると痛みが少ないといわれます。



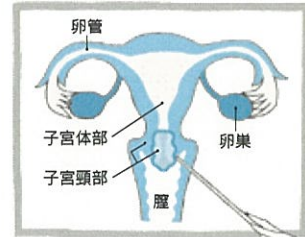
超音波(エコー)検査

乳房に超音波をあて、はね返ってくる反射波を画像化する検査です。乳房表面にゼリーを塗って、その上から器具をあてます。痛みはなく、X線を使わないので、妊娠中や妊娠の可能性のある人でも検査が受けられます。乳腺が発達した若い人に向いています。



子宮頸がん

検診の
スズメ



子宮がんには、子宮頸がんと子宮体がんがあります。子宮頸がんは子宮の入り口の子宮頸部で発生するがんで、子宮体がんは胎児を育てる子宮体部で発生するがんです。子宮頸がんは発見されやすく、また早期に治療すれば予後のよいがんです。しかし、進行すると治療が難しいため早期発見することが重要です。

ウイルス感染が原因に

子宮頸がんの発生には、ヒトパピローマウイルス（以下 HPV）の感染が関わっていることがわかっています。HPVは性交渉で感染しますが、多くの場合はがんになる前に排除されます。しかし排除されず長期間感染が続くとがんの発症につながります。HPVの感染を予防するワクチンがありますが、ワクチンを接種しても検診を受けることは必要です。また喫煙も、子宮頸がんの危険因子であることがわかっています。



子宮頸がんの危険因子

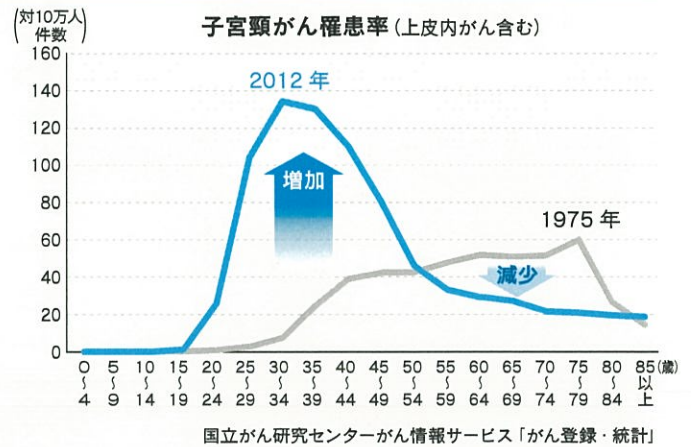
- HPV の感染
- 多産
- HPV 以外の性感染症
- 喫煙
- 経口避妊薬の使用

若い人で増えている子宮頸がん

子宮頸がんの発症は、30歳から40歳がピークです。50歳以降では減少している一方、20歳代・30歳代で増加しています。

子宮頸がんは、がん細胞に進行する前の異形成という状態を経てがんになることがわかっています。子宮頸がん検診では、症状がない異形成の段階で発見することが可能です。

20歳から30歳代は結婚・出産の年齢層であり、子宮温存が可能な早期のうちに発見することが大切です。



正常 ▶ 異形成 ▶ 上皮内がん ▶ 浸潤がん

▲検診を受ければこの段階で発見できる

子宮頸がん検診を受けて早期発見を!

～子宮頸がん検診とは?～



子宮断面
綿棒やブラシなどで頸部の細胞をこすり取る

再検査や精密検査が必要といわれたら必ず受診しましょう

国では、20歳以上の女性に2年に1回、細胞診による子宮頸がん検診を受診することを推奨しています。子宮頸がん検診は、子宮頸部の細胞を綿棒やブラシなどでこすり取り、顕微鏡で調べる簡単なものです。上皮内がんなど、早期の段階で見つければ、子宮を温存した治療が可能です。

「医師採取」と「自己採取」が選べる場合は、「医師採取」での検査が確実です。

HPV検査

細胞診のほか、ウイルスの有無を調べる HPV 検査もあります。HPVには多くの型があり、がんのハイリスクとなる型の感染を調べる検査です。国が推奨する検査にはなっていませんが、子宮頸がん検診とあわせて受診すると安心です。

子宮頸がん予防ワクチン

子宮頸がん全体の50～70%の原因とされる HPV「16型」と「18型」を予防するワクチンです。すべての型に効果があるわけではないため、ワクチンを接種しても子宮頸がん検診を定期的に行うことが大切です。接種をするかどうかは医師とよく相談しましょう。